

千刈狸の呟き

～ 運・不運と対岸の火事 ～

カチカチ狸

これまで、「運がいい、悪い」をあまり気にすることはなかったが、「あるかもしれない」と最近感じるようになった。それは、東日本大震災からちょうど10年目の朝、通勤のカーラジオでニュースキャスターとゲストのトークを聞いた時だった。

話題は、津波に襲われても児童全員が助かった小学校と、84名の児童職員が犠牲になった小学校の件に及んだ。避難誘導の差で明暗が分かれてしまったようだ。これを聞いて頭をよぎったのは犠牲になった人たちの運の悪さだった。これだけではない。原発事故で家を捨て、まだ故郷に帰れない人たちがいる。かれらは今も怒りと悔しさにさいなまれ、運の悪さを嘆いているのだろうか。

一方私事だが、同震災時、仙台に出張していた遠縁の男性が車ごと津波に押し流された。危機一髪で車外に脱出したとき目の前に電信柱が立っていた。これにしがみつかり、眼下で荒れ狂う津波が引くまでその上端によじ登って九死に一生を得た。この様子は動画ニュースに取り上げられたので知っている方もいると思う。彼はどう見ても運が良かったとしか言いようがない。そして、あの時秋田のような被害の少なかった地域に住んでいた自分も運が良かったのだ、と思った。

運とは、人知・人力の及ばないなりゆき、と辞書にある。かつて、松下幸之助が入社試験で君は運がいいか、悪いか?と尋ねて、悪いと答えた人はすべて落とされたそうだ。何となくわかる気もする。

この冬、県南は記録的大雪に見舞われ、秋田市や由利本荘市では低温・猛吹雪で車が立往生した。私もその被害ドライバーの一人で1時間以上車に閉じ込められた。これまで何度もホワイトアウトを経験し、そのつど大過なく切り抜けてきたつもりだったが、ついに運が尽きたかと思った。

降り積もる雪の前では、パワー全開で首を振り続けるワイパーがなんとも哀れで滑稽に映る。車外に出てフロントガラスの雪を掻き出したいが、大粒の雪に目を塞がれ強風雪にコートがめくれ上がり体が飛ばされそうになるのは嫌だし、すぐ後ろにいるはずの車に轢かれるかもしれない…。これがもし深夜の山中で遭難し、不幸にして命を落としたとすれば、たぶん世間の人々は運の悪い奴だったというだろう。

こんな体験の後だけに今年の冬は厳しいぞと身構えていたが、数日後には雨で雪はほとんど解けてしまった。あつという間に厳冬から春の雰囲気が変わり拍子抜けした。異常気象、地球温暖化といわれて

久しいが、温暖化なのにどうして大寒波・豪雪になるのか?調べてみると、高温になれば日本海の海水温度も高くなる。そのため強い上昇気流が発生する。その結果として非常に大きな雪雲ができる。それがシベリアの寒気とともに北西の風に運ばれ日本海側に豪雪を降らす、ということらしい。秋田よりずっと南の山陰や北陸にドカ雪が降る理由もこれで納得できる。

最近の自然災害は規模が巨大化し、地球のいたるところで頻繁に起きている。カリフォルニアやオーストラリアでは乾燥期になると毎年山火が発生し、多くの犠牲者が出ている。コアラなど野生動物が焼け出されたのも記憶に新しい。真っ赤に燃えさかる森林をバックに活動する消防士のシルエットが目につく。遠い世界の出来事として傍観してきた。ところが、2月に日本でも栃木県で広範囲にわたる山火が発生し、ついに対岸の火事ではなくなった。

自然災害で被害に遭った人を運が悪かったといってしまうのは早計かもしれない。犠牲者や被害状況を個々に具体的にみると、その背景にはかなりの割合で人災の要素があるからだ。前述の犠牲者84名を出した小学校の関係者は、運の悪さではなく避難時の人為的ミスに対して強い怒りを表明している。一方、犠牲者のいなかった小学校は幸運だったのではなく、ふだんの防災準備が功を奏したのだった。

猛吹雪で立往生した出来事を振り返ると、どうせ渋滞になるだろうと高をくくり出勤時間を大幅に遅らせたことが裏目に出てしまい、天候はさらに悪化の一途を辿っていた、というところに行きつく。これは運が悪いのではなく、判断ミスだった。大荒れの予報だったのでもっと詳しく調べておくべきだったし、その1週間前にニュースで見た北陸自動車道での猛吹雪による大混乱の様子をしっかりと脳裏に焼き付けておくべきだった。

結局わかったことは、いつ起こるかかわからない災害に対しては、運・不運をいう前に防災の準備を怠らないことが肝要で、そのためには対岸の火事をぼんやり見ていてはだめだということだ。これがこの冬に体験し思い至ったことだが、昔から言われてきた教訓と何ら変わるものではなさそうだ。

目下の大災害であるコロナ禍に世界が翻弄されて1年以上が経過している。変異ウイルスなどの情報収集に目を凝らし、運には期待せず、これまでに知りえた防御策を役立てながら収束する日を待ちたい。